

高校生のボランティア学習に関する実践環境の検討 ーボランティア先進校の実態に基づく考察ー

林 幸克

(名古屋学院大学)

【要旨】

高等学校においてボランティア学習をカリキュラム化するなど精力的な取り組みを行っているボランティア先進校の高校生と教師を対象に調査を行い、ボランティア学習の定着化を図るための実践環境について検討した。ボランティア学習に関わる情報収集方法、ボランティア学習に適した時間・時期、ボランティア学習をする際に影響を受ける人について分析・考察を行った。その結果、日常性のある学習環境を整備すること、教師が柔軟な指導観・教育観を持ち、地域社会とのネットワーク形成を促進することが、高校生のボランティア学習の活性化のためには必要であるという示唆を得た。

1. はじめに

青少年の体験活動、特にボランティア学習の教育的効果やその重要性が指摘されるようになってから、様々な取り組みが行われるようになった。学習指導要領の改訂（1998年）や社会教育法の一部改正（2001年）、学校教育法の一部改正（2001年）など、一連の法令等の改正内容に着目するとその一端をうかがい知ることができる。それを受けての具体的な動きとして、学校教育における総合的な学習の時間を中心とした特別活動や道德などの教育課程内における取り組み、社会教育では、青少年教育施設や公民館等の社会教育施設が中心となった学習の場・機会の提供などを挙げることができる。あるいは、大学におけるボランティアに関する取り組みに関して、ボランティア関連科目の開講に着目した調査では、全国の大学の約49%がボランティア関連科目を開講している状況にあるという結果が報告されている¹⁾。

そうした状況下で、青少年、特に高校生が主導権を握って学校の内外で様々な活動を展開する事例がみられるようになってきており、その取り組みの分野・領域は地域の活性化やバリアフリー、国際平和、環境問題等、多岐にわたる²⁾。その背景には、小・中学校段階からの継続的な学習の蓄積や地域社会における学習環境の充実などがあるものと思われる。また、近年では高等学校段階でも、大学と同様にボランティア関連科目をカリキュラム化したり、学校内にボランティアセンターを設置するといった動きが散見されるようになってきており、それも一因として考えられる。

そこで本研究では、ボランティア学習に関して精力的な取り組みを展開している高等学校に焦点を当て、実際にボランティア学習を行っている高校生やその学習支援者である教員は、ボランティア学習に関してどのような認識でいるのか、両者の意識・実態の掌握を試みる。そして、それを踏まえた上で、今後、高校生のボランティア学習をより促進するためにはどのような環境整備が必要とされているのか、その在り方について考察する。

なお、これまでの研究作業³⁾として、ボランティア先進校の教師を対象とした聞き取り調査、同じく生徒を対象とした質問紙調査からボランティア学習に関する実践環境について検討を進めてきた。本論文では、それらの一連の研究成果を基盤としながら、十分な分析ができなかった教師対象の自由記述形式の質問紙調査の結果を用いて、さらに考察を深めるものとする。

2. 研究方法

(1) 調査対象

ボランティア先進校 4 校の高校生及び教師を対象とした。本論文でいうボランティア先進校とは、学校内にボランティアセンターを設置している、ボランティアをカリキュラム化している、ボランティアの単位認定を行っているなど、ボランティア学習に積極的に取り組んでいる学校である⁴⁾。

(2) 調査方法

2005 年 11 月に高校 1 年生～3 年生 480 名を対象に、学校経由の留め置き法による質問紙調査を実施した（有効回答者 412 名、回収率 85.8%）。また、教師 20 名を対象に 2005 年 6 月～11 月にかけて自由記述式の質問紙調査（有効回答者 10 名、回収率 50.0%）、2005 年 5 月～7 月にかけて 4 名に対して面接調査を行った。本論文では、高校生と教師に対して行った質問紙調査の結果をもとに分析・考察を進める。

(3) 調査内容

高校生に対して、性別、学年、ボランティア学習に取り組みやすい人数、高校入学前後のボランティア学習体験、ボランティア学習レディネス、ボランティア学習の効果、①ボランティア学習に関わる情報収集方法、②ボランティア学習に適した時間・時期、③ボランティア学習をする際に影響を受ける人、ボランティア学習の評価について質問した。教師に対しても同様の質問項目について聞いた。なお、本論文では、①～③を取り上げるものとする。

3. 結果と考察

(1) ボランティア学習に関わる情報収集方法（第 1 表）

ボランティア学習についての情報収集方法に関する 12 項目は 5 件法の尺度であり、データ入力に関して「きわめてあてはまる」を 4 点、「かなりあてはまる」を 3 点、「わりとあてはまる」を 2 点、「少しあてはまる」を 1 点、「あてはまらない」を 0 点として得点化した。全体としては「(4)インターネットなどの情報網を使う」が 2.32 点で最も高く、以下「(8)ボランティア関係のイベントに参加する」(1.93 点)、「(2)テレビを見る」(1.91 点)、「(12)ボランティア体験者に聞く」(1.86 点)と続いた。他方、得点の低かったものは「(3)ラジオを聞く」(0.86 点)、「(11)公民館やコミュニティーセンターなどの相談窓口で相談する」(1.13 点)、「(10)学校の相談窓口で相談する」(1.17 点)であった。男女比較をすると「(8)ボランティア関係のイベントに参加する」(0.56 点差)、「(7)ボランティア情報誌、機関紙を読む」(0.38 点差)、「(5)地域の回覧板や掲示板を読む」(0.32 点差)、「(6)都道府県、市区町村などの広報誌を読む」(0.30 点差)、「(12)ボランティア体験者に聞く」(0.29

点差)の5項目において、女子の得点が有意に高かった。また、学年比較をすると「(2)テレビを見る」で2年生の得点が3年生よりも高く、「(10)学校の相談窓口で相談する」で3年生の得点が1年生よりも有意に高かった。

また、教師に対して、ボランティア学習に取り組みたい希望を持つ生徒から問い合わせがあった際の対応について質問紙調査で聞いたところ、次の回答が寄せられた(第2表)。これをみると大きく3つの対応に分類できる。第1は、生徒の要望等の話を聞き、相談に乗り、それについて学校やボランティアセンターに寄せられている既存の情報と照合し、希望に合致するか否かを判断するという対応である。第2が、具体的な活動に結び付くような助言(アドバイス)をするという対応、第3が、具体的な活動を直接的に紹介・教示するという対応である。いずれも、学校内やボランティアセンター内などにボランティア学習情報の蓄積があり、また、教師自身もある程度の対応ができる知識や人脈・ネットワークを有しているからこそできる対応の仕方であると考えられる。

(4点満点、上段:Mean 下段:SD)

	全体	男子	女子	t 値	1 年生	2 年生	3 年生	Tukey 法
(1)雑誌、新聞を読む	1.62 (1.21)	1.57 (1.24)	1.65 (1.20)	n.s.	1.70 (1.14)	1.61 (1.26)	1.54 (1.24)	n.s.
(2)テレビを見る	1.91 (1.26)	1.88 (1.25)	1.94 (1.27)	n.s.	1.99 (1.17)	2.09 (1.27)	1.63 (1.30)	2>3
(3)ラジオを聞く	0.86 (1.04)	0.85 (1.03)	0.87 (1.04)	n.s.	0.94 (1.06)	0.86 (1.04)	0.77 (1.00)	n.s.
(4)インターネットなどの情報網を使う	2.32 (1.34)	2.24 (1.42)	2.36 (1.29)	n.s.	2.34 (1.30)	2.40 (1.37)	2.18 (1.36)	n.s.
(5)地域の回覧板や掲示板を読む	1.72 (1.27)	1.52 (1.27)	1.84 (1.25)	2.51*	1.68 (1.31)	1.69 (1.28)	1.80 (1.20)	n.s.
(6)都道府県、市区町村などの広報誌を読む	1.63 (1.25)	1.45 (1.23)	1.75 (1.25)	2.43*	1.61 (1.23)	1.63 (1.27)	1.66 (1.26)	n.s.
(7)ボランティア情報誌、機関紙を読む	1.75 (1.39)	1.52 (1.33)	1.90 (1.41)	2.77**	1.74 (1.41)	1.75 (1.37)	1.77 (1.41)	n.s.
(8)ボランティア関係のイベントに参加する	1.93 (1.41)	1.59 (1.39)	2.15 (1.38)	3.95***	1.83 (1.40)	1.98 (1.39)	2.01 (1.45)	n.s.
(9)ボランティアセンターの相談窓口で相談する	1.21 (1.33)	1.09 (1.30)	1.28 (1.35)	n.s.	1.09 (1.23)	1.19 (1.40)	1.36 (1.36)	n.s.
(10)学校の相談窓口で相談する	1.17 (1.25)	1.07 (1.14)	1.24 (1.31)	n.s.	1.02 (1.16)	1.12 (1.24)	1.41 (1.32)	3>1
(11)公民館やコミュニティセンターなどの相談窓口で相談する	1.13 (1.21)	1.13 (1.21)	1.12 (1.21)	n.s.	1.07 (1.15)	1.13 (1.22)	1.19 (1.27)	n.s.
(12)ボランティア体験者に聞く	1.86 (1.37)	1.68 (1.30)	1.97 (1.40)	2.17*	1.78 (1.36)	1.94 (1.41)	1.85 (1.34)	n.s.

第1表 ボランティア学習に関わる情報収集方法

***p<.001 **p<.01 *p<.05

ボランティア先進校の実践をみると、A 校では、生徒への情報提供の流れとして、地域から学校（特にボランティアセンター）にボランティア活動の依頼があり、そこから生徒へボランティア活動に関する研修会やイベントの情報等、様々な情報提供・ボランティア活動のアドバイスが行われている。B 校でも、学校内のボランティアセンターが地域におけるボランティア活動の発信基地・センターとしての役割を担っている。また、D 校においても、学校間共同で地域住民に開かれたボランティアセンターを目指し、公開講座・フォーラムを開催し、生徒・一般市民が共に学べる学社融合・生涯教育の機会を設定している。こうしたボランティアセンターを活用することが日常的に可能な環境にあることが、相談窓口等を使った直接対人的な情報収集を行うことに反映されているものと思われる。

A 校	ボランティア活動の情報を提供する。本校はボランティアセンターがこれを行っているので紹介する。又ボランティア部、JRC 部等も紹介する。ボランティアについての基礎知識の学習と技術の習得についてアドバイスする。
	活動の希望とか、個人的に話しをして、企画書（個人レベルでも）を書いてもらい、アドバイスをしていきます。
B 校	何がしたいのかを聞き、身近なことで何かないか、相談にのってみる。そこから、必要であれば、アポイントをとってみる。
	どのような内容の活動がしたいのかを聞き、現在校内での募集があるか確認し、なければ協議会等に直接さく。
	まずどのような活動をしたいのかを聞き、学校に募集が来ていないかを調べる。なければ、近隣社協さんに情報提供をお願いする。
	その理由と、どういったことがしたいか具体的に話をきく。
C 校	担当職員や各自治体や各ボランティア団体を紹介する。
	窓口となっている担当職員を紹介する。
D 校	いくつかの福祉的施設を紹介する。
	ボランティア教育プログラムを提示し、同意を求める。

第 2 表 ボランティア学習を希望する生徒への教師の対応

(2) ボランティア学習に適した時間・時期（第 3 表）

ボランティア学習に適した時間・時期に関する 9 項目の得点処理は情報収集方法と同様の手続きをとった。

全体としては「(6)総合的な学習の時間」(2.41 点)、「(1)教科の授業」(2.00 点)の得点が比較的高く、「(7)平日の学校が終わった後（放課後）」(1.05 点)、「(5)部活動」(1.12 点)の得点が低かった。男女比較をすると「(9)学校の長期休業中（夏休みなど）」(0.50 点差)と「(8)学校の休みの日（土・日・休日）」(0.31 点差)の 2 項目で女子の得点が有意に高かった。また、学年別では「(7)平日の学校が終わった後（放課後）」(1 年生が 2 年生より高い)、「(8)学校の休みの日（土・日・休日）」(1 年生・3 年生が 2 年生より高い)、「(9)学校の長期休業中（夏休みなど）」(3 年生が 2 年生より高い)の 3 項目で学年差があった。

教師に対して、カリキュラム内での時間確保に適切な機会を質問紙調査で聞いたところ、ホームルームやロングホームルーム、学校行事といった特別活動の時間、総合的な学習の時間という回答が多かった（第 4 表）。

この結果から、比較的まとまった時間の確保しやすい「特別活動」や「総合的な学習の

時間」が適切であると捉えていることがわかる。各教科の学習活動の中で取り組むことは難しいかもしれないが、特別活動、総合的な学習の時間という 2 つの領域とともに、教科との連携を密に図っていくことで、量的な学習時間と共に、質的な学習理解が深まると認識しているものと考えられる。

(4 点満点、上段:Mean 下段:SD)

	全体	男子	女子	t 値	1 年生	2 年生	3 年生	Tukey 法
(1)教科の授業	2.00 (1.42)	1.91 (1.47)	2.06 (1.38)	n.s.	1.92 (1.38)	2.22 (1.53)	1.84 (1.30)	n.s.
(2)生徒会活動	1.68 (1.22)	1.65 (1.25)	1.70 (1.21)	n.s.	1.60 (1.20)	1.84 (1.26)	1.61 (1.20)	n.s.
(3)ホームルーム活動	1.83 (1.28)	1.82 (1.25)	1.83 (1.30)	n.s.	1.78 (1.25)	1.91 (1.38)	1.79 (1.21)	n.s.
(4)学校行事	1.91 (1.25)	1.84 (1.25)	1.96 (1.25)	n.s.	1.89 (1.23)	1.90 (1.30)	1.94 (1.23)	n.s.
(5)部活動	1.12 (1.25)	0.99 (1.20)	1.21 (1.28)	n.s.	1.19 (1.32)	1.01 (1.22)	1.17 (1.21)	n.s.
(6)総合的な学習の時間	2.41 (1.24)	2.29 (1.18)	2.48 (1.27)	n.s.	2.29 (1.20)	2.55 (1.32)	2.39 (1.19)	n.s.
(7)平日の学校が終わった 後(放課後)	1.05 (1.14)	1.09 (1.12)	1.02 (1.16)	n.s.	1.20 (1.22)	0.88 (1.07)	1.07 (1.11)	1>2
(8)学校の休みの日(土・ 日・休日)	1.26 (1.33)	1.07 (1.21)	1.38 (1.39)	2.38*	1.36 (1.34)	0.98 (1.24)	1.45 (1.36)	1>2、 3>2
(9)学校の長期休業中(夏 休みなど)	1.85 (1.46)	1.54 (1.40)	2.04 (1.48)	3.44***	1.93 (1.47)	1.56 (1.45)	2.06 (1.44)	3>2

第 3 表 ボランティア学習に適した時間・時期

***p<.001 **p<.01 *p<.05

ボランティア先進校の実践をみると、放課後の生徒の居場所としてボランティアセンターが機能していることがわかる。ボランティアセンターにおいて生徒は、ボランティア・コーディネーターの役割を担ったり、総合的な学習の時間でボランティア学習を行う際には「先生」として活用される。A 校のように総合的な学習の時間の中でボランティア学習を市民教育という形で رفتたり、総合的な学習の時間やロングホームルームの時間を事前の準備学習として位置づけ、学校行事の中で実践するという B 校のような形式もある。C 校でも同様であり、課題研究を総合的な学習の時間の一部として位置づけ、意識的に地域社会に出ていく活動を展開している。D 校でも総合的な学習の時間とボランティアセンターの役割を絡める形で実践している一方で、教科学習との連携の必要性を強く意識し、サービス・ラーニングという独立した教科として位置づけている。また、有志の活動であるという意味から、部活動とボランティア学習の連携のあり方も視野に入れていることがわかる。学習時間の確保に関して、A 校では、ボランティア学習のためのテキスト（総合的な学習の時間における「市民教育」）を作成している。D 校では「サービス・ラーニング」

(学校設定科目 2 単位選択科目)、「NPO・NGO 理解と実践」(学校設定科目 1 単位選択科目)、総合学習 1 年分野「福祉・ボランティア理解」(2 単位必修)を置いている。また、B 校では、総合的な学習の時間と学校行事の一環である「学年ボランティア」の連動を通して、ボランティア学習の充実を図ろうと試みている。これらのことから、総合的な学習の時間を中核にボランティア学習に関する理論的・実践的な学びを展開していることがうかがい知れる。

	ボランティア学習に適した時間	その理由
A 校	生徒会行事、ロングホームルーム、総合的な学習の時間等。教科では家庭科、福祉科等。	ボランティアの種類によりそれぞれが適切かと考えた。教科の方は課題学習、インターンシップと合わせて考えても良いと思う。
	学習と結びついた活動でなければならないと思います。どのような教科と結びついてもいいと思います。	ボランティア活動は特別の活動ではなく、発想と、その転換をうながすものです。要素はどの教科の中にへも入れることができますが、高校生の時に意図的に実施していかないと、社会人になったら全員のその機会が提供されるとはかぎりません。
B 校	ホームルーム、ボランティア活動時間として組む、放課後	目的を意識づけして行うので、時間を確保することが難しいと思うから。
	学校行事や総合的な学習の時間	教科としてはボランティアを成績に加味しなくてはならないので、そのようなカリキュラムとしてではなく、生徒の意思や活動を尊重した時間としたいから。
	LHR、学期末に 1 日時間、総合的な学習の時間	教科に入れこむと評価されるということで、偽善の行為も出てくるので、生徒の自然な意欲で行われるべきだと考えるから
	LHR、総合的な学習の時間、学校行事	(記述なし)
C 校	考えない。	カリキュラムの中に組み込むと全員がやることになる。気持ちのない生徒に実施させるには、受け入れ側に失礼になる。
	学校行事として一日単位(または半日)として行う。	まとまった時間をかけて行わないと、中途半端な活動となる。
D 校	放課後	ボランティアは自発的な活動であるべきだから。
	全教科領域。知的知識修得と実践の連結。	知識理解は使って意味があるから。

第 4 表 教師がボランティア学習に適していると考える時間

(3) ボランティア学習をする際に影響を受ける人 (第 5 表)

ボランティア学習をする際に影響を受ける人に関する 10 項目について、影響を受けるか否かを複数回答で求めた。

全体としては「(3)学校の同級生」が 60.4%で最も高く、以下、「(1)家族」(37.1%)、「(5)クラス担任」(34.0%)、「(8)地域の NPO や団体などで活動している人」(31.1%)と続いた。

男女比較をすると「(3)学校の同級生」(10.9 ポイント差)、「(4)学校の後輩」(9.5 ポイント差)、「(8)地域の NPO や団体などで活動している人」(7.8 ポイント差)、「(9)地域の子ども会やボーイスカウトなどで活動している子ども」(7.3 ポイント差)などで、女子のポイントが比較的高かった。学年別では「(3)学校の同級生」(3 年生が 2 年生より 14.8 ポイント高い)、「(1)家族」(1 年生が 3 年生より 10.0 ポイント高い) の 2 項目で比較的差が大きかった。

(上段:人数、下段:%)

	全体	男子	女子	1 年生	2 年生	3 年生
(1)家族	153 (37.1)	61 (38.1)	92 (36.5)	61 (41.8)	52 (37.1)	40 (31.8)
(2)学校の先輩	38 (9.2)	16 (10.0)	22 (8.7)	11 (7.5)	16 (11.4)	11 (8.7)
(3)学校の同級生	249 (60.4)	86 (53.8)	163 (64.7)	84 (57.5)	77 (55.0)	88 (69.8)
(4)学校の後輩	122 (29.6)	38 (23.8)	84 (33.3)	43 (29.5)	40 (28.6)	39 (31.0)
(5)クラス担任	140 (34.0)	60 (37.5)	80 (31.8)	56 (38.4)	49 (35.0)	35 (27.8)
(6)部活動の顧問	63 (15.3)	27 (16.9)	36 (14.3)	22 (15.1)	24 (17.1)	17 (13.5)
(7)個人的な習い事(スポーツクラブや塾などの指導者)	54 (13.1)	22 (13.8)	32 (12.7)	16 (11.0)	23 (16.4)	15 (11.9)
(8)地域の NPO や団体などで活動している人	128 (31.1)	42 (26.3)	86 (34.1)	43 (29.5)	43 (30.7)	42 (33.3)
(9)地域の子ども会やボーイスカウトなどで活動している子ども	70 (17.0)	20 (12.5)	50 (19.8)	23 (15.8)	31 (22.1)	16 (12.7)
(10)その他	18 (4.4)	7 (4.4)	11 (4.4)	8 (5.5)	5 (3.6)	5 (4.0)

第 5 表 ボランティア学習をする際に影響を受ける人

教師に対しても同様の質問をしたところ「友人」「地域の人々」「親・家族」という意見が比較的多かった(第 6 表)。この結果から、身近にいる人からの影響力が大きいということが共通していると思われる。個々の高校生にとって身近に感じる人物というのは異なるかもしれないが、その言動や関わり合いから感化される部分は大きいと考えられる。

ボランティア先進校の実践に則してみると、A 校では、ボランティアセンターが地域活動のネットワークの拠点として機能し、生徒の自己責任の下で、地域との関わりを重視した活動を展開している。B 校では、次の三者の影響力が強いがうかがえる。一つは、地域社会である。養護学校や社会福祉協議会といった地域社会の団体・機関等との関連が

強くあるため、そこからの影響が大きいというものである。二つ目は、家族である。社会福祉学科の特殊性として捉えることができるかもしれないが、家族に関係者がいて、幼少の頃からその姿を見て、触れてきていることが大きく影響しているというものである。第三は、学校における先輩・後輩のつながりである。地域社会の施設との交流が定期的に行われるようになるに伴い、関わっている生徒が卒業しても、後輩がそれを引き継いで活動するといった形で後継者育成が為されているという面がある。C校では、地域社会との関係が大きく影響している。専門的な学習成果の発表の場、専門性を実務的な側面で実践する場として、地域社会が位置づいている。その場があることによって、生徒の活動への動機づけもなされている。D校も、地域社会との関連の強さが影響を与えている。地域社会を意識し、そこでの活動を有意義にするために企画書や報告書を出しており、地域社会の影響を強く受けていることがうかがえる。

	影響を受ける人	その理由
A 校	友人、教師(担任、教科担当)、NPO や団体で活動している人達の報道、家族等	身近な人の言動は影響力が大きいと考える。
	友人	(記述なし)
B 校	親、家族、友人、情報(TV、雑誌、パソコン)	高校生にとって生活の中で身近なところから、影響を受けると思います。
	友人、ボランティア先の方々	はじめは、「友人が行うから一緒に」という型が多いが、その後ボランティアに行ってみて、その活動、またその先の人々の魅力を感じ継続されることがあるから。
	親、家族、教員、友人、知人、ボランティア先の利用者さん・職員さん	身近な人からの影響が大きいと思われる
	在校生(特に先輩やクラスメートなど)	身近でその内容についてきけるから
C 校	身近な人物で活動している者。	そのような人が身近にいと、私もやってみようという気になりやすい。
D 校	受け入れ先の利用者	人との交流により自分が見えてくるから
	家庭、地域、学校	人間が他の人の模倣を行うため

第6表 教師が考える「高校生がボランティア学習をする際に影響を受ける人」

この結果から、ボランティア先進校では、学校内ではクラス担任や後輩、同級生の影響が大きく、学校を離れると地域活動への従事者の影響を強く受ける傾向にあることがわかる。B校では、PTA活動の重点目標に「PTAボランティア活動を盛んにする」と掲げて活動しており、PTAによるボランティア活動も企画実施され、保護者のボランティア活動の第一歩になっている。また、地域の社会福祉協議会や関係機関との連携、ネットワークづくりを積極的に進めている。B校のみならず、ボランティアセンターを設置している学校は地域社会との関わりを重視しており、その地域社会でのボランティア学習実践やそれを通じた様々な人々との出会いがこの結果の背景にあるものと思われる。

4. おわりに

まとめにかえて、次の2つの観点からボランティア学習の実践環境の在り方について考察する。

(1) 学習環境の日常性

ボランティア先進校は、部活動や委員会活動とボランティア学習がリンクしており、日常的にボランティア学習に取り組むことのできる環境が整備されている。身近にそうした環境があることで、継続性のあるボランティア学習が可能となっている。また、イベントに参加したり体験者に話を聞くといった直接的な方法や相談窓口を活用するといった既存の施設・機関の活用、関連する情報誌を活用するといった方法で、情報を得る傾向が強かった。学校内のボランティアセンターを活用することなどが日常的に可能な環境にあることが、こうした直接対人的な情報収集を行うことに反映されている。ボランティア学習に適した時間・時期に関しても、総合的な学習の時間の中で「市民教育」「福祉・ボランティア理解」を学ぶ機会を明確にしたり、選択科目として「サービス・ラーニング」「NPO・NGO理解と実践」を設定している。ボランティア学習やその周辺領域に焦点化した学習を展開する時間が確保されていることは看過できない。こうした実践状況から、日常的にボランティア学習に関わることができる環境を整備・拡充することで、継続性・発展性のあるボランティア学習を展開することが期待できる。

(2) 教師に求められる資質・能力

ボランティア学習に関して、教師のボランティア学習体験が必ずしも豊富であるとは限らない。現行の学習指導要領で学んできた高校生の方が、総合的な学習の時間や特別活動、道徳などの中でボランティア学習体験を重ねている場合もある。そうした際に、教師として基礎的な知識・理解を有しておく必要はあるものの、その一方で、「わかること」と「わからないこと」、「できること」と「できないこと」をきちんと整理して高校生に伝えるなど、高校生と一緒に学んでいこうとする姿勢が求められる。ボランティア先進校の高校生は、総合的な学習の時間をボランティア学習に適した時間であると認識する傾向が強く、学校や地域施設・機関などの相談窓口を活用したり、くちコミを含めた直接的な対人コミュニケーションを通して情報収集する傾向にあった。また、地域社会との関わりを重視しており、その地域社会でのボランティア学習実践やそれを通じた様々な人々との出会いから、学校内ではクラス担任や後輩、同級生の影響が大きく、学校を離れると地域活動従事者の影響を強く受けていた。

これらのことを勘案すると、教師が高校生と共に学ぶという学びのスタンスで、教師と高校生で学びを創り上げていくことが望まれる。情報収集の側面に着目すると、学校に寄せられてくるボランティア学習情報には限界や偏りがあり、高校生のニーズに十分に適合するものであるとは限らない。外部からの情報を受信するだけでは不十分で、学校の内外に対して情報発信することが重要になる。情報を発信することで、活動状況が周知され、それに見合った情報が集まりやすくなる。ボランティア先進校では学校外の地域社会の諸資源を学校教育に取り込んでいくことが大きく影響を与えており、地域社会との連携・協働を図ることのできる環境整備を進め、そこでの情報交換等を通して形成されたネットワークを少しずつ拡大・拡張し、高校生の学習ニーズに合ったボランティア学習情報提供が

十分にできるように努めることが教師には求められる。

注記・引用文献

- 1)長沼豊、「大学・短大におけるボランティア関連科目の実態調査（2005 年度開講分）」報告書、2007
- 2)財団法人トヨタ財団、「トヨタ財団 地域社会プログラム 選後評・助成対象一覧」、2007
- 3)林幸克、「高校生のボランティア学習に関する研究－学校と地域社会における支援のあり方－」（2006 年度法政大学大学院人間社会研究科博士論文）
- 4)ボランティア先進校の詳細については、前掲 3)を参照されたい。

＊本論文は、法政大学大学院人間社会研究科に提出した博士論文（2006 年度）を再分析し、加筆・修正したものである。